

“マイナスをプラスへ変えるまちづくり” ～誇れる炭鉱の町を目指して～

炭鉱に対するイメージの変化

九州にはかつて多くの炭鉱があった。これらは日本の近代化を支えてきた重要な産業で、今日の日本の基盤を作ったといっても過言ではないであろう。しかしながら、エネルギー政策の転換によって石炭の需要が減り、こうした炭鉱は閉山され、かつて栄えていた炭鉱の町々も、いつしか活気を失い、往年の面影も忘れ去られようとしている。

一方で、いまだに炭鉱に対するイメージは決して良いものとは言えない現状がある。そうしたイメージは、意外にも一般の人々よりも、むしろ地元の人々に強く残っているのが事実だ。かつての町の活気を支えたこれらの産業の陰には、おそらく地元の人には分からない様々な苦しみや悲しみが沢山あったのであろう。そのためか、こうした元炭鉱の町では、これらの産業遺産をあまり積極的に表に出さない場合が多い。跡地についても、これらの遺構を残すのではなく、全く別の新たな開発を行おうとするのが一般的のようだ。

しかしながら近年、こうした炭鉱に対するイメージは変わろうとしている。かつての炭鉱をリアルタイムで知らない若い世代にとって、こうした遺構はむしろ魅力的にさえ見えているのだ。最近、若者達の間ではこうした遺構や廃墟は一つの人気スポットとなっている。これは、おそらくテーマパーク等の作られた非日常だけでは飽き足らなくなった若者達の感覚と、近年の近未来映画等に見られる廃墟的・退廃的イメージがうまく重なったからではないだろうか。

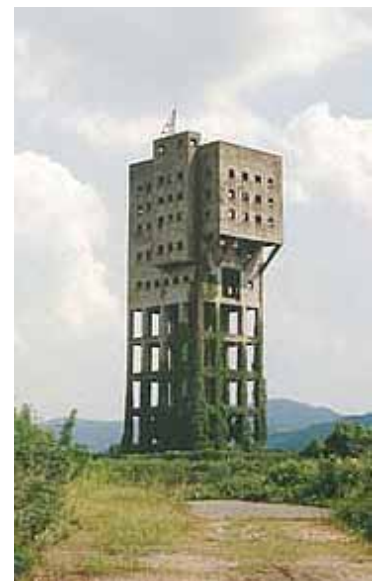
きっかけはともあれ、大量生産と大量消費により使い捨てられていくモノ達や、仮想と現実の境界が曖昧になりつつある現代社会の中において、こうした過去の遺物がある種のリアリティの拠所になろうとしていることは興味深いことだ。

これからの“まちづくり”の方向性

幼児は自分の周りにあるモノ達に触れたり、ぶつかることによって、はじめて現実の空間を認識するようになるということがある。同じようなことが、“まちづくり”にも言えるのではないだろうか。美しい無国籍の理想郷をつくるよりも、時には地域にとって“痛み”であったかもしれない負の遺産を活かすことが、その町に“リアリティ”を与え、アイデンティティの拠所となるのではないか。負であるか正であるかは一つの評価軸上の判断でしかない。さまざまな軸からその評価を再構成し、新たに価値を浮かび上がらせることが、これからの“まちづくり”で最も大切なことの一つではないだろうか。

炭鉱の持つマイナスのイメージも、近年の新たな価値観の上で、変化しつつある。また、こうした過去の“痛み”も、現代そしてこれからの地域に実在感を与え、個性を育む重要な財産だと考えられる。

私は、九州に沢山残るこうした炭鉱の遺構を、単に負の遺産として取り壊してしまうのではなく、むしろうまく“まちづくり”に活かしていけるのではないかと考える。そのような事例の一つとして福岡県の旧志免炭業所を採り上げてみた。



旧志免炭業所竪坑櫓(筆者撮影)

志免鉱業所の概要

志免鉱業所は 1889 年（明治 22 年）、海軍省の直営炭鉱として現在の須恵町新原に開鉱したが、敗戦による海軍省の解体で、1945 年（昭和 20 年）運輸省に移管し、1949 年に日本国有鉄道に引き継がれ、1964 年閉山した。この鉱業所には、世界最古の鉄筋コンクリート製ワインディングタワーである堅坑櫓（1943 年完成）がある。これと同型のタワーはヨーロッパに 1 つ残すのみで、非常に貴重な近代化遺産である。その容姿は極めて独特で美しく、一度見たら忘れられない存在感を持っている。

以前からこの炭鉱一帯の跡地利用については、様々な検討がされてきたが、ボタ山の処理方法、経済的な問題、関係各者の利害関係などから、いずれも実現化していない。跡地利用の結論がでないうちに、堅坑櫓は長年の風雨にさらされたため老朽化が進み、近年、安全性等の問題からその処分が検討されており、この貴重な遺産は解体の危機に瀕している。

私はこの事実を知った時、日本の発展を支えてきた先人達が苦勞して建てた貴重な櫓を、そう簡単に壊してしまっているのだからと思う。このような建造物は一度解体したら、おそらく二度と建造されることはないだろう。

近代化遺産を活かしたまちづくりの可能性

一方で近年、こうした近代化遺産についての再評価は活発化しており、イギリスではアイアンブリッジが産業系の遺産として初めて“世界遺産”に登録され、日本でも佐渡金山や石見金山などが登録に向けて活動を開始している。また、平成 8 年の文化財保護法改正によって、文化財登録制度が導入され、こうした近代化遺産が次々と文化財登録されるようになってきている。

そこで私は、この貴重な近代化遺産を文化財登録することによって、補助支援等を利用しながら補修を行い、関連各機関や地元住民の連携のもと、地域の誇りをもてるようなシンボルにイメージアップし、さらにこれを中心とした周辺跡地の再整備を行ってはどうかと考えた。

基本的に堅坑櫓は貴重な遺産である上に、今のままでも十分に存在感があることから、櫓自体には極力手を加えず、補修する程度に留めたほうがよいだろう。むしろ、これをどう利用するかというソフトの構築と周辺跡地の整備が重要となる。具体的な検討は、住民参加等により検討を行う必要があると思うが、跡地には広大な空地とボタ山があるため、これらを一体的に有効利用する必要がある。

ボタ山の活用

最近、「冒険遊び場」という新しいタイプの公園が注目を浴びている。「自分の責任で自由に遊ぶ」がモットーで、これまでの禁止事項だらけの公園とは全く異なり、木登りや基地づくりなど自分の好奇心を追求し創意工夫を重ね、時には“失敗”や“痛み”を感じながらも、たくましく育っていくことを目指したものだ。全国で 100 箇所ほどあるが、まだ福岡県には固定したものはなく、最近その実現化への動きが活発しつつあり、この志免鉱業所跡地は格好の適地ではないかと考える。特にボタ山は、高低差があるうえ、水溜まりや林など様々な冒険の素材の宝庫であり、これを活かさない手はないのではないだろうか。



旧志免鉱業所のボタ山(筆者撮影)

“冒険遊び場”のもう一つの特徴は、「プレイリーダー」と呼ばれる年長の遊び仲間がいて、子どもたちの遊びの手助けをする点である。ちょうどこのボタ山は、志免町・須恵町・粕屋町の3町の共有地であることから、3町からボランティア等を募り、プレイリーダーを持ち回りでやってもらうことにより、3町の協力体制と役割分担が構築できると共に、それぞれの独自性をだすことによりバリエーションのある“遊び”が展開できるのではないかと考える。

竪坑櫓の活用

次に、この跡地の中心的シンボルとなる竪坑櫓を如何に活かすかということであるが、平常時は基本的に現存の勇姿を留めていることが重要である。なぜならこれはこの地域の記憶の結晶だからだ。在りし日の面影を留めておくことが、記念碑の役割だからだ。しかし、それだけではただ遺産を保存しただけで地域の誇りには成り得ない。

そこで、私は一つのイベントを提案する。おそらく、この櫓を美しく見せることが、この土地への誇りを深める最も分かり易く、効果的な手法ではないかと考える。私はこの櫓を目の前にした時、この広大な土地の中に忽然と立つ櫓が、闇夜の中にライトアップされたらどんなに美しいだろうと想像した。永い年月の間、風雨にさらされた過去の遺産であっても、年に一日だけでもスポットライトを浴びたらきっと美しく輝くのでないか。それだけで、地元の人はこの櫓に愛着を感じ、誇りを感じられるのではないだろうか。



光の祭典イメージ(筆者作成)

年に一度だけこの跡地を利用した“光の祭典”を開催したらどうだろう。世界中のアーティストを呼び、この期間はアーティストに“プレイリーダー”になってもらい、昼間は“冒険遊び場”を利用して地元の子供たちとのコラボレーションにより、作品やインスタレーションの作成、パフォーマンスの練習などを行ってもらおう。基本的に“光”をテーマとしてもらうことにより、夜には敷地全体を利用した“光の祭典”を地元主催により開催し、ライトアップされた櫓を中心に様々な作品やパフォーマンスを繰り広げる。世界中から集まった光のアートを通じて、この地で様々な人々が交流し、夜空に浮かび上がったあの櫓を見あげて美しいと感じてくれたら、どんなに素晴らしいことだろう。

かつての炭鉱がこの期間だけでも光り輝いたら、おそらくこの土地の過去そしてここで苦勞した先人達への敬意にもなるだろうし、何より地元の人々はこの土地を誇ることができるのではないだろうか。私は、この櫓がいつまでも勇姿を誇っていることを心から願う。